空き家利活用コンテスト2022 優秀賞

住宅部門

事例 04

T邸

生まれ変わった思い出の祖母宅
親族が集うセカンドハウスに

縦に長い住宅の一番奥にあるリビングダイニング。部屋と廊下を仕切る引き戸を取り払い、明るく開放的な部屋に生まれ変わった。祖母が暮らしていた頃の思い出が宿る柱がアクセントに。床や内壁には杉材を使用。温もりが感じられ、ゆったりと過ごせる。

受賞者の祖母が昭和58年に新築した住宅は、同居の伯父が亡くなり、祖母が親族宅に転居したことから約32年間空き家状態に。その間に経年劣化が進み、屋根の腐食や雨漏り等が発生。そのままでは近隣住宅に迷惑がかかる恐れがあったことから改修を決意した。

鳥取城下の「家老小路」を入った場所にあり、間口は約3.6mと狭いものの、奥行きは長く約20mも。その立地を生かして玄関を1部屋分セットバック、駐車スペースと屋根付きポーチを確保して利便性をアップした。玄関から奥へ向かって延びる廊下は、トイレ、洗面所・浴室、キッチン、リビングダイニングと、邸内各所をつなぐ役割を担う。また、浴室とキッチンの間には小さな中庭があり、採光の工夫がなされている。

また、建物の一番奥で倉庫として使用していた2階建て部分を減築し、リビングダイニングの窓から出られるウッドデッキを新しく造作。BBQなどを楽しむことができる上、日中はその窓から陽光が差し込み、いつも明るい。ソファから青空を見上げることができるのも気に入っているとか。親族が集まって交流する拠点として、ちょっとした非日常が味わえるセカンドハウスとして、有効に活用している。

住宅の中央部にある洗面所と浴室。浴室の向こうには小さな中庭がある。改修前は外光があまり入らない造りであったため、「明るい家にしたい」という受賞者の要望を受けて設計士が提案したものだという。

玄関からリビングダイニングまで約13m続く長い廊下には、昭和建築の懐かしさと「その先に家族がいる」という安心感がある。やわらかい杉板の感触が素足に心地良い。

（写真上・右下）倉庫跡に新設したウッドデッキ。1階部分だけ残した外壁のおかげで周囲の目を気にせず寛ぐことができる。
（写真左下）対面のシステムキッチン。親族が集まったときも使いやすい。

[DATA]

【所在地】鳥取市東町　【構造】木造2階建て　【築年月】昭和58年
【改修後の用途】セカンドハウス及び親族が定期的に集う場所
【間取り構成】個室1室（2F 未改修）、リビング・ダイニング、キッチン、トイレ、風呂
【改修期間】2019年3月～2019年6月
【改修費用】約1,600万円
【設計者】セップ建築設計事務所　【施工者】池内組